

第四章 清刊本

清朝には宋元明本に對して清本と稱すべきもの無し。これ其の學風の着實にして妄に古を誣ひざりしの致す所なり。故に今清刊本と標す。

清刊本の目睹せるは澤存堂本、棟亭本、小學彙函本及び鄧氏本の四種。この他に新安汪氏の明善堂本ありと邵亭知見傳本書目に見ゆれど未見。

1 澤存堂本(圖版三の左・四の右参照)

澤存堂は吳郡の張士俊の書齋の名なり。士俊の傳未だ之を詳にせず。玉篇は群經音辨、廣韻、佩觿、字鑑と合刻せられて世に之を澤存堂五種と稱す。

首に康熙四十三年の朱竹垞の序ありて

予、吳下に寓居して宋槧の上元本を毛氏の汲古閣より借得せるに張子士俊これを開雕せんことを請ひて梨棗の材、尺幅の度、臨撫讐校の勤、晨昏を舍かず、繫傳類篇、汗簡、佩觿の諸書を并取して源を推し流を析ち旁稽曲證して年を逾えて後に書を成せりと云へり。上元本と云へるの非は既に述べたる所なるが、旁稽曲證も亦却て學者の悦ぶ所と

ならず。顧千里は書宋槧廣韻後に於て

張氏の書を刻する好んで點竄をなす、玉篇の如き群經音辨の如き舊本を以て之を勘するに往々眞を失ふ

とまでに云へり。宋本既に正しきを此の本に却て誤れるものゝ二三は上の圖書寮宋本の條にも云へり。豈張氏依る所の宋本は圖書寮のよりも劣れりしか。

今は大字本と石印縮刷本とありて大字本は高さ六寸六分五厘、濶さ四寸九分五厘、又縮刷本は高さ五寸五厘、濶さ三寸五分五厘(内側)たり。

士俊が群經音辨の跋にていふ所にては康熙四十年に汲古閣の毛扆が宋本玉篇を士俊に示して其の刊行を勧めたれば廣韻と併せて開雕して四十四年に成り、偶々車駕の南巡に逢ひて之を行在に進めたるものなりとぞ。

本書の刊行せられてより六年の後康熙四十九年に勅撰せられし康熙字典には既に宋本と元本との兩玉篇を引ける處あり。其の心部 忉 字の條に

玉篇功大也 又一本玉篇思也

と注せるが、功大也は宋本の思也は元本の文なる如き是なり。朱竹垞がこの本を推稱せし爲か、天祿琳瑯書目既に宋本數部を著録すれば清初より存する者ありてか採入せられたるならん。

清の江有誥の音學十書の等韻叢說の中に「釋神珙の五音圖」の一條あり、曰はく

正反居隆宮とは居隆切乃ち宮の字たるを言ふ。

到反宮閭居とは宮閭切乃ち居の字たるを言ふ。

正疊韻居閭とは居と閭と皆魚韻の字たるを言ふ。

傍疊韻宮隆とは宮と隆と皆東韻の字たるを言ふ。

正到双聲居宮とは居と宮と皆同じく見母たるを言ふ。

傍到双聲閭隆とは閭と隆と皆同じく來母たるを言ふ。

後の四圖も此に倣へ。

正紐眞整正隻とは四聲の順數なり。

傍紐眞征顛之とは同一照母にて下の一字は傍行なり(韻鏡にては眞は第十七轉、征は第卅五轉、顛は第廿三轉、圖は戰字、同音)。之は第八轉の第三等照母の字たり。今「下の一字傍行」といふは眞征之の三字は平聲なるに顛字のみ去聲なるを云ふか。

疊韻眞盈之怡とは眞盈が疊韻、之怡も疊韻又眞之が同母、盈怡も同母たるを以てなり。

羅文眞軫顛職とは平上は順行し去入は轉紐せるなり(平上順行とは眞軫が平上の差あるのみにて、韻鏡にて同母同等なるをいふならん、去入轉紐とは顛の入聲は折字、韻學集成にては浙字)なるに今職を取れるを云ふか。

綺錯眞正質折志旨鬪とは四聲の常に循はずして互に相交錯せるなり。

傍韻眞引征以とは眞引切の軫字となり征以切の止字となるをいふなり。

正韻眞寅之怡とは眞寅切は仍是眞の字、之怡切はなほこれ之の字なるをいふなり。

双聲眞整眞旨とは眞整切はなほこれ整の字、眞旨切は是仍旨の字なるを云ふなり。

反音眞之寅反とは之寅反の眞の字となるを云ふなり。

後の七圖此に倣へ。

以上二圖玉篇の末に載すれども初學未だ明め易からず、故に詳に之を注す。

と。今按するに此の説明は江氏の精到にも似ず浮疎の嫌なき能はず。十紐に於ても單に表されたる者を説明せるのみにて正疊韻と正疊重道と等が同じき所以に觸れぬは勿論九弄に於ても例へば傍韻に於て「征以切は止字となる」と云へるが其の止字は何故に此處に必要なるか、之止の二字は平上の關係にはあれど之こそ此處に在れ止字は竟に見ゆる所なきもの、其の反切を出して何事を説明するか。又綺錯を單に「四聲の常に循はずして互に相交錯せる」と云ふまでにて出されたる七字の關係を辿らぬも如何、この七字が無意味に引き出されたるに非ざるべきは吾人の前に述べたる所、たとへ吾人の述ぶる所は鑿に過ぎんとも又江氏の如く看過すべきにはあらざるべし。此等の諸點は正に初學の明らめ易からざる所然るに之に觸れずして「詳に之を注す」と云ふとも恐らくは初學詳に

之を會するに苦しまん。

愼吾いふ此の辨は五音之圖にも觸れたれば寧ろ前の九弄圖の條に出すべき如くなれども、九紐の文字は澤存堂本のに據りたれば此に收めたり。讀者再び九弄圖の條にも對看せられんを請ふ。

2 棟亭本

棟亭は奉天の曹寅字は子清の一字なり。寅は漢軍鑲藍の旗人にて世々瀋陽に居り、通政使、江寧織造に官して棟亭詩詞鈔を著せり。棟亭五種は玉篇の外に廣韻、類篇、集韻、禮部韻略を收む。其の集韻には朱竹垞が汲古閣より傳鈔本を得て康熙丙戌(四十五年)に寅に屬して刊行せしめたる由、顧千里の補刊本の序に見えていかにも澤存堂本の玉篇に似たるに、此の玉篇には毎卷末に棟亭藏本丙戌(康熙四十五年)九月の墨記有るのみなるは此の底本を棟亭自ら入手せるならん。朱竹垞之を知らざる理なきに僅に三年の間に張氏のと疊出せるも奇といふべし。

大中祥符の牒より序啓ありて總目となり又本文となる。すべて八行、毎行十六字、又本文にては双注は毎行二十字、大字はその二字を占む。著者の見たるものは半面高さ五寸三分五厘、廣さ三寸六分(ともに内側)なり。一四、五一、九、十一、十三、十四、十九、二十一、廿三、廿四、三十の六本に分れて何れも上に述べたる墨記あり。第六本は此の墨記の後に分毫字様、反紐圖を收

めたるが、序の次に五音聲論、五音之圖(張本とは其の排置同じからず)九弄之圖を出して且元本に存する羅文反様も出せり。

因にいふ本書が楊州詩局にて刊せられたりとも云ふは曹が命を奉じて全唐詩を鈔木せし其の場所にて亦この書をも出したればなり。

3 小學彙函本

小學彙函とは兩廣鹽運使鍾謙鈞の輯むる所にして玉篇の外に方言以下十貳種を収めたり。鍾均字は雲卿、巴陵の人、同治十二年に刊せらる。

玉篇は彙函の第六十九、七十一の三冊に收められ、蘇州張氏澤存堂本に依ると稱せれど、朱竹垞の序も玉篇の序啓も明朝活字に改め、本文も十行々廿一字詰(張氏のは注文にて廿七字詰)としたれば殆ど舊本の面目を留めず、故に學者の擯くる所となりたれど校勘は行届きたる様なり。

4 鄧氏本

新化の鄧顯鶴が道光三十年に邵州の山東精舍にて摹雕せしもの。高さ六寸八分、濶さ四寸八分なれば張氏の大字本とも全同ならず。全編字牀は克似して殆ど辨じがたきが往々張本

の訛を正せること口部咸字の注の咸績を庶績に、木部榆字の注の白粉を粉に、水部沭字の注の葵陵を茶に作る類あり。又缺畫は張氏のよりも多し。示部祇の注の敬本文の禎禎、土部地の注の丘字にて末筆もしくはその他を闕く類なり。

本書には校刊札記一卷あり、各部の文字につきて考說せるもの補遺を合せて五十五葉半、引證經傳異文七葉半、類隔更音和切の三部より成る。鄧の本意は校刊に在りし如きは自ら

拙の校勘札記を作る、點畫の譌誤を糾正するを以て主となせど、時に亦旁徵遠引して字義を解説するの書に類す。

と云へるにて明かなり。而も旁證遠引信にして徵あるは後學を沾溉すること少からず。その一例を引かん

亟 居力の切、急なり、疾なり、又丘致の切、數なりと。案するに亟は説文にては「敏疾なり、人」に从ひ、口に从ひ、又に从ひ、二に从ふ、二は天地なり、徐鍇曰はく「天の時を承け、地の利に因り、口之を謀り、手之を執るとは時失ふべからざるなり」と。説文解字注に「今人亟を入聲にては急と訓じ、去聲にては數と訓するに分つ。古は是の分別なし。數も亦急なれば二義あるに非ず」と。今案するに玉篇に兩音ありて廣韻にも亦志と職との韻に兩收すれば古に分別なしとは云ふを得ず。惟詩は多く棘を假りて亟となす、棘人變々の傳に棘は急なり

と曰ふが如し。玉篇第四百四十一苟部に「居力の切、急なり、自ら急勅するなり亦亟に作る」と、苟の亟と音義皆同じく、艸部の苟と本、一字に非ざるを知る。經典相承して比して之を同じうするは謬れり、苟部は羊に从へば上の二畫連らず、苟の艸に从ふ者と微しく別なり。顯鶴字は子立、湘阜と號す、嘉慶の舉人にして寧郷の訓導に官し、博く群籍を究め、一意先哲を表章して歸然として楚南の文獻たるもの三十年、卒する年七十五。詩古文も詳贍演迤と稱せらる。此の札記の作にはその友人沈栗仲與りて力ありと云ふ。

本書は彙函本よりも二十三年の前出なり。前三種はいづれも素本なれば類從せしめたる爲に此の順序となりぬ。